

カシミールでの5日間



田島 繁

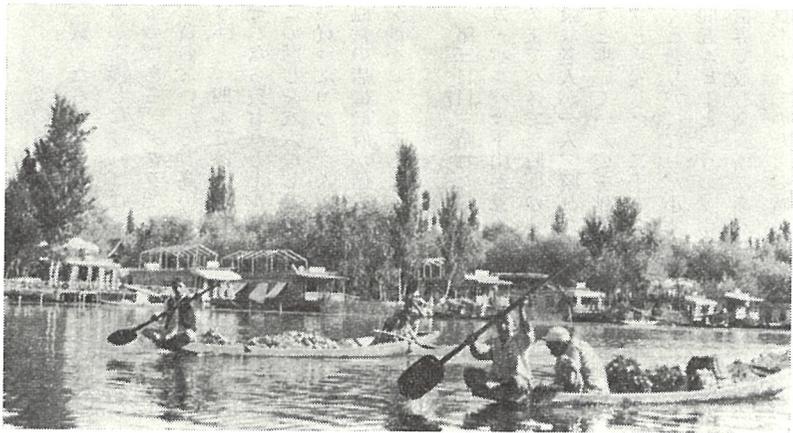
ニューデリーからジェット機で一時間二十分。インド人の避暑地・カシミール上空にやってきました。ヒマラヤ山系の山々に囲まれたこの地域を上空からカメラに納めようとしたら乗務員にフィルムを没収するぞときつく注意され、びくりした。そういえばカシミールは印・パ粉争の目なのだ。インドとパキスタンが分離独立する時、カシミールの帰属が問題となった。ヒンドゥ教徒の藩王はインドへの帰属を表明したが、イスラム教徒が七、八割も占める住民はパキスタンへの帰属を要求し、暴動にまで発展した。国連の調停で収拾されたが、正式な帰属は、なお係争中だ。

スリナガル空港におりると空気がサラッとして、とてもさわやかな気候であった。この緯度は日本の大阪あたりに相当し、標高千六百米であるから、まるで北海道に来たような感じである。沿道にはポプラ並木が数キロにわたって続き、ダリヤやカンナなど

日本で見える草花が庭園で咲き誇っていた、日本の農業技術者が現地農民に作物の品種改良などの指導をしていると聞いたが、ムガル庭園の近くで、稲穂が頭を深くたれ、プラムやとうがん型のスイカが露店にならべられているのを見た。第一日目の目的地、パハルガムに行く途中、軍のトラックがたて続けに五十台程フル・スピードで通りすぎていった。パハルガムに入るとなつかしい日本の田園風景が目についた。山があり、澄んだ川があった。今まで余りにも汚れ、殺伐とした景色に



ジュータンを手で織る職人



朝市に野菜を運ぶ人達

接してきたので、この美しい風景は一服の精神安定剤となった。この自然を満喫しようとして川原に下りてゆくと、ターバンを巻いた男性がすっ裸で水に浸っていた。用を足した後がいたるところにあった。上の方で明後日お祭りがあるので中継地のこの村は、色白で鼻の高いインド・アリア語族、浅黒く鼻の低いドラヴィダ語族、それに日本人によく似ているチベット人であふれていた。写真屋やカシミヤ・ショールなどを売る店が三百米程建ち並んでいたが、その端に産児制限を奨励する看板（父母と息子・娘の四人の絵が描かれている）が立っていた。ニューデリーの若い人に何人子供がいますかと質問したら、二人です。もうつくりませんと模範解答が返ってきました。一人ですと答えた人にもう一人つくれませぬというニヤツと笑っていた。しかし妻を四人まで持てるというイスラム教徒の多いこの地域で、この看板はどれだけ効果があるのだろうかと疑った。標高二千二百米にあるホテルは日没と共にだんだん冷えてきた。毛布にくるまりブルブルふるえながら日記を書いた程。ガヤ付近では四十度を超え、玉の汗が吹き出たのに。カルカタでは五時すぎに

は暗くなったのに、ここでは七時すぎ。インド亜大陸の大きさをあらためて感じた次第です。

*

第二日は東洋のレマン湖といわれるダール湖の湖脚に船先を並べているハウス・ボートに分宿した。七つの寝室とサロン、バス・トイレ付きの水上ホテルである。陸地との交通にはそのホテル専用のシカラ（三、四人乗りの屋根付小舟）を利用するのだが、買物の帰りそのシカラが見当たらないと。一ルピー（五十円）払って他のシカラで運んでもらわなければならず不便である。夕暮れのダール湖をカメラに納めようとシカラを乗り出すと果物や帽子をつんだ小舟があちこちから近よってきた。毛皮の帽子を三十五ルピーで買わないかと。インドで買物をする時はまず半値以下で交渉し、だんだん中をとってゆき、ドルをちらつかせればその値で必ず売ると買物のコツを教えてもらっていたので、十五ルピーなら買うと半ばおもしろ半分に答えた。少し値を下げてきたがもういらないうって舟をこぎ出したら、十五ルピーでいいというって売ってくれた。政府直営の店では同じような

帽子が二十ルピーで売っていたので、思わずインド商人の手の内を見た感じがした。

インドでの買物は全く骨がおれる。言い値で買ったらバカを見る。いちいちいくらにするか交渉しなければならず、大変な精力がいるのである。アグラでセンスを一本十ルピーで買わないか。高いと言うと、二本ではどうかと。四本では。よし五本ではどうだと。それなら買おうと十ルピー支払い、満足顔でこの話しを友人にしていたら、十本十ルピーで買ったよという人が現われた。その点政府直営の店は政府が値段を決めるので、値引き交渉をしなくてもよく、安心して買物できる。

*

第三日目。晴れた日には世界第八位のナンガ・パルバット山が見られるというグルマルグまでバスで三時間ゆられていった。途中健康な老人が一人、晴れた空の下、大自然を悠々と歩いている姿を見て、ここは平和郷だナアと感嘆した。二千六百米のゲルマルグにつくと曇り空になり、小雨が降ってきた。一時間五ルピーというのでボニー（小馬）に乗り世界で最も高い所にあるゴルフ場を背景に写真をとっていたら、晴れていればあのあたり

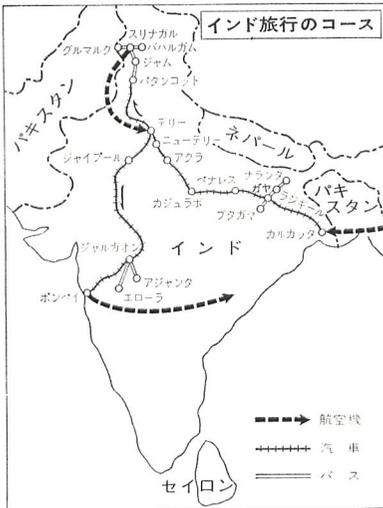
にナンガが見えるただけ言ったお付きの仲間がガイドだからもう五ルピーよこせと。全く人をだますのもいい加減にせよ。不正直さに腹だたしい怒りを感じた。そしてイギリス人を夫に持つインド人の女性が腹だたしげに語っていた言葉を思い出した。インドは独立前はイギリスによってうまく統治されていた。独立後は外国人は要職につけなくなり、ホテルでもボスはインド人で、その下にイギリス人がいる。しかしインド人は自からの手でインドをうまく統治する能力がない。政治家は自分のふところをこやしこ

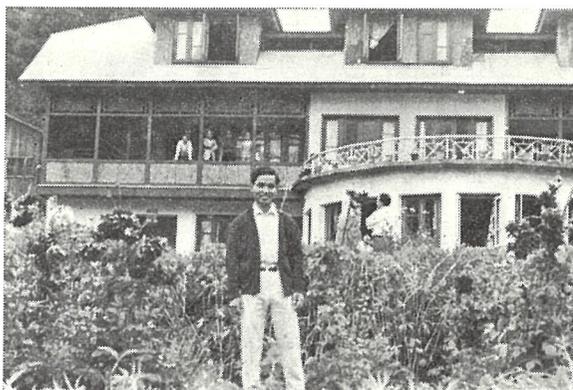
とばかり考え、人民救済のため
の政策なんか無い。インドの貧
困・不正直・怠惰は政治の貧困
が原因であると。ボニーの馬子
は三十代位にふけて見えたが
実は二十二才で、二十一才と十
九才の妻を持つイスラム教徒だ
から、さぞ生活が苦しいのだろ
うと察し、少しチップとしてさ
し上げた。

*

第四日目。午前中シカラに乗

って水上よりスリナガル市内を見学した。ダール湖よりジェラム川に行く場合、湖の水位が一米程高いので、シカラを水門に入れ水位を調整しなければならない。この水門めがけて各ハウス・ボートのシカラが激しくせり合っ様、まるで先陣争いだ。シカラの柱はきしんでいる。インド人にこんなエネルギーがあつたのかと、皆おもしろくこの光景を見物していた。ガヤでわれわれの汽車が道をふさいでしま、朝食が終るまで四十分間も腰を





パハルガムのホテル前での筆者

下ろして、ジーと待ち続けていたあのインド人とは大きな違いだ。さて水門を通りすぎる立派な調度品を備えた水上生活者の生活や川端でシーツなどをたたきつけながら洗濯している光景や、木造四階建ての合同家族の家屋が見られた。丸太や商品作物などを運ぶ人々もあり、この川は生活に欠かせない川だ。シ

カラをちょっとこがさしてほしいと頼んだら、気前よく代ってくれた。本人は水門での激しいぶつかり合いに疲れたのかずっと寝ころんだまま。流れにのってゆく時は楽しいが、流れに逆らってゆく時のしんどいこと。途申代ってほしいナアと思ったが起きないので、男の意地でこぎ続けた。最初の水門近くに帰ってきた時やっと交代してくれた。降りる時こぎ賃のチップを要求してきた。こちらがほしい位だ。三時間余りもこいで手にまめが四つもつくったんだから。午後、カシミール・ジュータン製造工場を見学した。父親と息子二人で一つのジュータンを手織りで織っていた。十才になる少年も学校を終えて手伝いに来ていた。一つ織り上げるのに六ヶ月かかり、百万円はすると。

*

第五日目。ハウス・ボートの若主人から時計・カメラ・ベルを売ってくれとせがまれたが今使っているからダメだと断った。するとセーター・替ズボン・スポーツ・シャツ・パジャマならいいだろうと。自分もみやげ物が増え、その上ジャイプール、ボンベイとこれから暑いところへ行くのだからここで売って

しまおうという気になり、買った値段より少し安くして百十五ルピーで交渉した。ところが相手は半分の六十ルピーで売れと。頭にきたので絶対売らぬと行って部屋に帰った。ここを引き上げる間際に六十七ルピーではどうかと。もうどうでもなれという気持で手を打った。するとまだ干してあったパンツや靴下までもっていかれた。空港にゆくバスの車窓から女子の学校で隊列をつくり、行進の訓練をしている光景がみられた。

最近パキスタン軍がインド国境に移動し、両国の間に不穏な空気の流れっていると報道されているが、この平和郷・カシミールに何とも起らねばよいがと案じている今日この頃です。
(中学校教諭・社会)

×

△注▽カルカッタよりニューデリーまでは同中雑誌「きささげ」に掲載